W97
8

西鶴文粹

西鶴置土産

尾崎紅葉、幸田露伴
各自筆書入

国立国会図書館　西鶴置土産 W97-8

ガラス使用

W97
8

60. 9. 19
85W35798

国立国会図書館　　西鶴置土産　W97-8

ガラス使用

149

置土産

巻の一

大釜のぬき残し
古金庄が寝覺

つらき牧傘なしの雨
情はふぢ崎が待夜
水は袖にかくる迷惑
たがひに裸物語
夢は所方の風呂敷

一 大釜のぬきのこし

世は外聞つゝむ風呂敷に替帷子。夏は殊更供の者はれぞして自由成がたし。むかしは定まりて柳ごりに物を入。皷のしらべ拂ぬるきにてかゝげ是を持させけるに。それは葬禮の時か。公事人の供なり。近年の大臣は。小畠染の兩面またはゞんがらの大嶋のふろしきにあつき時分も暮かたの用意して。單物袷をとりを入させ。利根なる小者つれたるは古かね買にせても三百貫目より内の身躰にはあらぞ。

国立国会図書館　西鶴置土産 W97-8
ガラス使用

国立国会図書館　　西鶴置土産　W97-8

挟み込み物

ガラス使用

149

置土産

大釜のぬき残し
古金庄が寝覺

一らき牧傘なしの雨
情ハふぢ崎が待夜
水ハ袖にかくる迷惑
たがひに裸物語
夢ハ所方の風呂敷

巻の一

一　大釜のぬきのこし

世ハ外聞つゝむ風呂敷に替帷子。夏ハ殊更供の者はれずして自由成がたし。むかしハ定まりて柳ごりに物を入。皷のしらべ拵ぬるきにてかゝげ是を持させけるに。それハ葬禮の時か。公事人の供なり。近年の大臣ハ。小畠染の兩面またハ蚤んがらの大嶋のふろしきに。あつき時分も暮かたの用意して。單物袷をとりを入させ。利根なる小者つれたるハ古かね買にせても三百貫目より内の身躰にハあらず。

国立国会図書館　西鶴置土産 W97-8
ガラス使用

一

爰に難波津の横堀川のほとりに。媱酒のふさいに身を分もなふ。胸ハけふりの毎日塩屋のふじ崎といふ美君にこがれ。銀でなる分里の女ながら。後ハ勤め外になし。此男より誰にかハと。黒髪の半きりて。世間に其れを隠さず。いとしさに此にがたと。名に立とし八十九の花の咲ころ。此里の色も香もひとりして知つたがほ。そこしハ悪い程なれども。いかにしても外の女郎のなるまじき事ハ。世にある客を見捨。揚屋のかどを闇にさへびく〳〵し

て、春の夜のひとつ着物袖の嵐をいとふに。因果ハ始る雨かなしく。やどりの軒下も人の灯挑うるさく。此まへ取出の時分。家買てとらせたる太皷が方へはしり込。聞える聲かさかに傘一本かせといへバ。女房が下女にいひ付て編笠ならバござるといふ。さても足もとを見立たる返事する。木履かせといふならバ。日和のよい時御出なされと申べし。さりとてハ物志らずめ。米の百目する時娘を八坂へやる談合。廿五日様の名號まで質に置後世を取

なづき時も。金子十両の合力前後せつたる物を勘定すれば。家の時より此かた三貫七百目。小判四十七両。米十八石。着物羽織け一其外ちよこ〳〵心付せし事留帳にいつけど覚がたし。是を忘れて。今度唐笠一本かしてくれぬい。さりとていなどきおかたなり。是をおもふに女郎ほどまことあるものいなし。いひかいせし事をたがへだして身をしのび命にかけて。一夜もあいれを。どしなぐさめん事なし。外のさはりと成事更にかいもくなりて。と

かくちはぬがあれの為とて雨に身ほそめて。氣のつきる軒づたひ。やう〳〵宿に歸れば。町の年寄ども念佛講のかへりと見えしが。我等が門に立とまりて。主が聞居るともしらず。いづれ此家貳拾四貫目にハ買徳なり。此格子取てすて。錢見世か。ゆうそく出しうけの長藏を小借屋に直し。かど引まいしておもてのぶんハ七筵の箕用にしたて。壹ヶ月に百九拾目づゝ出さまれば。是ぞよき隱居せしきと。賣もせぬ先に人の家のさし圖をするハ無

国立国会図書館　西鶴置土産 W97-8

ガラス使用

念ながら是非もなし。聞ほど堪忍ならねど。家質の連判頼みをけば。世上ほど自由にならぬ物なしと。男泣それど。萬事ハ歸らぬむかしとおもふに。筋むかへの兩替屋の親仁のいへるハ。親の庭好して植をかれし。蘇鐵ハ今に有かといへバ。それハいつの事。迚も賣家の覺悟して。岩ぐみまで。ひとつも以前の形ハなし。あんな仕果世にまたと有べきか。既にありさまの聟に成筈を。首尾せいでお仕合。またくしの西隣にも親に懸り。若い子どもの風

うへに置事もいやと。鼻に。しいよせて。物悪そふにいへり。おのれ後から。ふみたふしてもとおもへど。ねも世間ハ思案する程むづかしく。ひそかに戸をたゝけバ。五十あまりの下女罷出。よひほどにてお歸りあれかし。八つの鐘聞てからも。しばしの事と。いふ聲ばかりして闇がりなり。火が消たかといへバ。油が無いといふ。それ程の才覺がならぬかと。火うち箱さがして。茶の下へ燒付。そのひかりのうちに二階へあがり。ふるき長持をこ

国立国会図書館　西鶴置土産 W97-8

ガラス使用

ぼちて。夜もそがら是を焼火して。ひとり文
などよみながら。雪の袖をあぶるうちに。門
を遠慮もなくたゝけば。寐た貌も成がたく。
誰といへば。色友達四五人。むりやりに。は
しへ。さむき夜の庭火。亭主が物好。どふも
いへぬと。これらも傘なしの濡身をほして。
何も馳走はいらぬぞ。酒はひとつのませとい
ふ。つねくせいを申て。何時なりとも御出あ
そばせ。内にさし合はなし。のぞみ次第の食
悦さすべしと。其言葉もぜひにさけを呑たる

所と。徳利手樽をさかせども。いかなく一
滴もなかりし。小半買ふべき銭もなく。此才
覺畫さへならぬに。夜るの事なれば。ましてや
分別出ざりしが。大庭に十七ならべて只ひ
とつ賣残せし大釜引ぬき。幸ひ横町に古金屋
のあるこそ仕合なれ。たゝきをこして。銭の俄
に入子細をかたり。つぶしの値にして四匁にま
けてやれば。銭わたしさまに。夜中に釜は何
とも合點はゆかねども。よもや是ぞかりを盗
でいござるまいといふ。神ぞ口をしけれども。

国立国会図書館　西鶴置土産 W97-8
ガラス使用

断申て銭を請取。やう〳〵外聞を酒につゝみて。此醉のあまりに明日ハ。こよひの欝晴しに道頓堀に出。中の太夫本にして是の亭主と。いふ。かたじけなしと約束かためて別れ。その明の日いよ〳〵御出の使。追付お跡よりと。物のいらぬ事なれバ男つくりさまして。夜前着物ぬいのばして。樺染の平帯。長柄のひとつざし。かどたをさぬ大鶴屋が扇。見た所ハ今も大臣なり。けふ一日のやとひ草履取に奥嶋の風呂敷かたげさせしが。此内へ其名

深込のふれんたゝみへ。人目にハ替着物とみるらんと我心のもづかしく。真齋橋筋に歩を南へいそげバ。芝居のはての人立に。小間物屋の男がうち水にゆきかゝり。腰から下へ。ひとしぼりに成て。着替なき身のかなしく。心腹立て眼色かハれバ。あるじもしり出。殷々御在子万まなたてまつる。此男め大和より二三日跡に。愛許へまゐり。つちけのもなれぬ者なれバ。ぜひに。御堪忍と亭主つかう成一言に。ねだるべき力なく。侍衆にかけぬ

国立国会図書館　西鶴置土産 W97-8

ガラス使用

やうにしやれと。いひ捨て通れば。是へ御腰をかけられ。御着物めしかへらるべし。さあ〳〵座敷へといふ程。きのどく。くるしからぬとて。濡ながら三津寺八まんのまへに行。此あたりに旅役者の笛ふきに。伊勢の吉太郎といふもの折ふしハ。子どもの一座によびて。二三度も物とらせたる事有。是より外の茶屋役者皆〻分あしく。立寄事ハおもひもよらず。うら借屋住の吉太郎にたづね寄ば。丸裸にて立出お久しや旦那。かゝるはにふの小屋へ

六

のお立寄かたじけ有といふ物じやと。俄にたゞこ盆の塵はらへど裸で飛まハるをみて。是ハ氣根つよしといへば。只今大酒いたしましたといへど。上氣をして。旦那此お小袖の濡ハとふしぎを立る。もじめをかたりて。是を日當へはせといふ。大臣も丸もだかにあつて。いづれけふハあたゝかな日じやと。椽がハ立ならび歯をくひしめて語り。我等ハけふにかぎつて着替もたせてまいらなんだ。其方がいつぞやのぐんあい嶋の着物をもしの程借と

国立国会図書館　西鶴置土産 W97-8

ガラス使用

いへば。我はだか何をかくしましよ。只ひと
つの郡内。裏ばかり洗はせまして。となりへ
くけにまいりし内。此仕合とかたる。大臣横
手を打て扱もことのかげたる内證かな。近日
着物はをり拙者はづむでござる。けふは宿に
首尾あしければ取にもやれずと。ふたり裸で
待うちの身振さまぐおかしく。やうぐ西
日になつて。ほしたる着物。ひあがりて大臣
これをめせば。吉太郎仕立着物も出来て二人
ともに常の姿となつて踊出て。待兼る振廻の

かたにゆけば。膳はまふて。酒のおもしろ
き所へ立出。いやといはれぬ人に留られて。
いづれもの手前迷惑千万といふ。今迄のお隙
入。御食はまつたかといはれて。いかにも
たべましたといへば。其通りに濟て。さき腹
の乱酒。さかなの中にも生貝など喰つくして。
夜食までの待遠く。吸物の出るたび。もし温
飩かとみれば。切かけ烏賊のまるもかさか
に。これらに腹もふくれず。笛吹の吉太郎は氣
をつくして立て歸る。一座は衆道の色に前後

国立国会図書館　西鶴置土産 W97-8

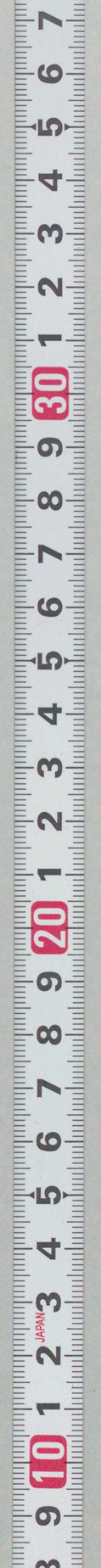
ガラス使用

忘るゝ醉心。我を覺えず。是ハ[illegible]と[illegible]へ
ば。お着物の入たる風呂敷取てまいつて。大
勢の中にて。是を明れバ。紺染の暖簾に丸の
ちに。仁の字付たるを取出せバ。此座興さめ
て。をの〳〵みぬ貌するも。なをおかし。隨
分氣づよき物ながら。酒さめて。うき世の人
を恥て。是より無用の色道とおもひ切て。家
財しまひて其身ひとりの草庵。むかしの友に
あふ事絶て。髭をのづからにのびし。手足終
にあらハず渡世に江戸鬢の賃びねりして。一

日暮しに難波の堀づめに身を隠し。大寺の樓
ハちかきに立とせあまり春を夢となし。蝶の
定紋も付ぞもめんを淩黄にやつて。世ハかろく
暮して身をあけぬ。

夢

国立国会図書館　西鶴置土産 W97-8
ガラス使用



国立国会図書館　　西鶴置土産　W97-8

挟み込み物

ガラス使用

忘るゝ醉心。我を覺えず。是ハ[illegible]といへ
ど。お着物の入たる風呂敷取てまいつて。大
勢の中にて。是を明れバ。紺染の暖簾に丸の
ちに。仁の字付たるを取出せバ。此座興さめ
て。をの〳〵みぬ貌さるも。なをおかし。隨
分氣づよき物ながら。酒さめて。うき世の人
を恥て。是より無用の色道とおもひ切て。家
財しまひて其身ひとりの草庵。むかしの友に
あふ事絶て。髭をのづからにのばし。手足終
にあらハぜ渡世に江戸鬢の賃びねりして。一

日暮しに難波の堀づめに身を隠し。大寺の撰
ハちかきに五とせあまり春を夢となし。蝶の
定紋も付ぞもめんを淩黄にやつて。世ハかろく
暮して[illegible]をあけぬ。

国立国会図書館　西鶴置土産 W97-8
ガラス使用

霞

巻の二

一　わたご亂の袖さむし

京ハ山〳〵ちかく。松の風もかよひて。冬空の氣色時雨もなく。雪もおもしろ過るほどふりぬ黒木うる聲もつねよりハせいしく。いまから日の暮るゝ事ハ夢じや。寶ぶねのうち出の小槌も何も持ぬものが。うつていいかな〳〵茶屋ぐるひするほどの銀も出ぬ世の中。なふてふらぬ物なればつかひ捨ぬうちに。分別せよと身にこりたる人の。異見も耳にいらず。皆になして合點のゆく人。それハおそし

堺の嶋長花紅葉の遊び
かべのくづれより小判珍し
百に成ても女郎ハこしつき
晝食なしの道中
小家も八朔の鱠

国立国会図書館　西鶴置土産 W97-8
ガラス使用

。昔より女郎買のよいほどをしらば。此躰迄
ハ成果じ頃時泉州。堺の徳長といへる大臣。
はじめハ野良にあそび。毎日に志のび御座舟
に。みねのこざらしを乗せて。ゑびす嶋の遊
興。世の人のそるほどの事しつくして。いつ
の須よりか都の嶋原にかよひ。大阪屋の野風
に吹たてられ次第にくだり舟。のぼりづめの
。女色男色此二色に身をなし。財寶皆になし
。さすが名高き大臣の。幽なる身と成て。四
季小紋のかさね小袖も大かはりして。千種色

159

のもめんぬのこの。身せばにして。借屋住居
のあはれに。やう〳〵牛代どもがなさけ。上
下三人の命をつなぐ。上荷舟のかしちんを。
壹ヶ目に四十五匁づゝあてがはれて。是にて
酢も味噌も茶も薪も万事の朝夕を狩明ける。
あはれや世にある時。悪所へつかはしたる。
文飛脚の通ひに志るせし。その賃銀も壹目に
ハ百目あまり出しけるに。生ながら。かやうに
成果るハ我ひとりのやうにおもはれて口惜
。それも時世なれバ。此浦にて引網の磯藻ま

国立国会図書館　西鶴置土産 W97-8
ガラス使用

まじりの小鰯。一かごのずか。五もん六もん
をねぎりて。けふハいはふ八朔なりと。手づ
から鱠にして。腹ふくるゝをたのしむハ。住
る甲斐なく。おもへど。其身になつて舌もく
ひ切がたし。科極りて。首はねらるゝ者も。
その日の朝食箸もつてくふハ。人の命ほどお
しき物ハなし。此隠者何祈るらん正五九月と
て。廿四日におもひ立。あたご果諧と。ひと
へ二日の旅用意。小者に風呂敷づゝみ。其身
もはらんずもけバ。下女ハつく〳〵此風俗を

聞て。あの鼻の高さにて何の願か有。天狗も
旦那殿にハ恥ぬべし。又火の用心も財寶ある
人こそ。この地蔵をたのみてよけれ。留守あ
づかるとて。から長持一つ自然の時ハ。女の
はたらきにても。のくる身躰貧者無用の物ま
ゝりと。おもひながらも。主命なれバ。機嫌
よく門おくりして立別れぬ。此大臣むかしハ
。かりそめの京のぼりにも。堺より六枚がた
の夜駕籠。人七匁に定まつて。四十二匁出
せバ。中を飛して。まだ夜ふかきに淀の小橋

国立国会図書館　西鶴置土産 W97-8
ガラス使用

のつめなる。偽の仁兵衛が所まで。嶋原より
のむかひ灯挑を出させ。水車のごとくまはら
せし事もと。うち詠て。それが門をバすこし
足ずゝに編笠。さささがりにかつぎ。鳥羽の
馬うしをよけるも、よほどせいにて。程なく
東寺より千本通に別かれ。くるわの濱越にあ
げ屋町のうらをゆくに。とふいふても都ほど
有て。物日の出かけたがた。柏屋丸屋の二階
に。衣裳ハ。兎角あかきがひとしほ目立物ぞ
かし。小歌聞へて撥のをと。是ハ何ともなら

ぬ。いま一たび千両切にしつかふさず。愛の
氣色をみたしと。八文字屋のうらなる。壁の
こぼれより。のぞきぬれバ。若もしらぬ女郎
が。座敷はなれて涼み所にこしらへし置床に
。枕もなくねころび。今時分女郎の手にハめ
づらしき本の小判を五両づゝ。四所にならべ
置嬉しそうにながめて。しれてある箒用を幾
度も数よむこそおかしけれ。是ハ京の客の金
やり時にあらず。九日廿日過に時づけ屋の小
判。さてハ田舎の素ひ人なるべし。何にして

国立国会図書館　西鶴置土産 W97-8
ガラス使用

四

も此里ハ。あれをやらひでハならぬ所と。お
もふうちに。宿のかゝが。ひねり文に五両計
持添たくしの方へも。半九さまより。御志
よかんに預りました。御返事よろしく。お
禮申てやらしやりませい。やりてのまかせに金
にかまいぬハむかしの事いまの十両ハ上代の
貳千両にもかけあひます。とに北國家ハ文を
國のひけらかし物に。人丸。貫之の筆より。
をの〳〵さまの書捨を。大事にかけ。紙のそん
ぞるをうたてく。裏うちして巻物に志給ふと

や。また地の家の文ハ皆までもよみ給ハず。
小宿にかいやり捨給ひ。挽碓の數紙になりて
。大夫様のお名を。小麦の粉によごすもよし
なし。それと又今の京の大くらいばかりと
つて勝手になりませぬ。迚も勤めのお身なれ
バ。殿ぶりの御物好やめにして。たとへ物い
ひあしく。一座初江にござりませうとも。こ
んな御状まする方が大臣なり。惣じてきいが
女郎さまがたの役に立ぬもの。隨分志やれた
る男自慢の人。京大阪堺まもあまたあれど。

国立国会図書館　西鶴置土産 W97-8
ガラス使用

無分別につかひ捨。揚屋の手前もあぢきろく
まいつて通るハ。その心からのたハけ者。女
郎ぐるひむかりにかたづけハ。すへながふあ
そばれしを。また野郎に戀をまたげ。あたら
身躰をつぶし。若盛にあてがひ世帯。うごく
と生て居て。なにがおもしろい事がると。
我を見付て。かく當言をいふやうに。是天性
なりと。身ぶるひして立のきあの内義がいふ
所。ひとつも違ひなし。橋本の己にし越て。
松の陀にかゝり。まことの道筋をあたこへま

あ

ゆれば。かゝるうき事も。きかざりし物を。
此里よそながらもみたくて。いはれざる京に
まハり。身にこたへたる人の言葉を合點して
。都もおもしろからず。嵯峨にゆけば。けや
夕暮になつて。人とむる女の袖にたよれば。
一夜ハ爰にさだめしに。筆屋といひて。廣座
敷なり。折ふしの境松茸に酒さまぐもてな
しける。女もふつかに見えず。機嫌とりて
。立ふるまひもどこやら。お町めきたる所有
。志かも其女ハ年まへなるが。廊下もしりや

国立国会図書館　西鶴置土産 W97-8

ガラス使用

お

国立国会図書館　　西鶴置土産　W97-8

挟み込み物

ガラス使用

無分別につかひ捨。揚屋の手前もわぢ己ろく
まいつて通るハ。その心からのたハけ者。女
郎ぐるひむかりにかたづけハ。すへながふあ
そばれしを。また野郎に戀をまたげ。あたら
身躰をつぶし。若盛にあてがひ世帯。うごく
と生て居て。なにがおもしろい事がると。
我を見付て。かく當言をいふやうに。是天性
なりと。身ぶるひして立のきあの内義がいふ
所。ひとつも違ひなし。橋本の己にし越て。
松の陀にかゝり。まことの道筋をあたこへま

れば。かゝるうき事も。きかざりし物を。
此里よりてながらもみたくて。いはれざる京に
まハり。身にこたへたる人の言葉を合點して
。都もおもしろからず。嵯峨にゆけば。けや
夕暮になつて。人とむる女の袖にたよれば。
一夜ハ爰にさだめしに。筆屋といひて。廣座
敷なり。折ふしの燒松茸に酒さまぐもてな
しける。女もふつかに見えず。機嫌とりて
。立ふるまひもどこやら。お町めきたる所有
。志かも其女ハ年まへなるが。廊下もしりや

国立国会図書館　西鶴置土産 W97-8

ガラス使用

う。只者とハおもハれぞ。くどき寄てむかしをかたれば。申さぬ事か嶋原の座持女郎。上佐といへる流れなり。いづれ移り香。つねならず。物まいりの精進をうちやぶりて。もめん寐道具に佗ながら。太夫にあふこゝ地して。又下向にもたいふれ。お初尾のこりを有切にとらせ。山崎よりの舟ちんなくてひろひならぢの歩行路。中食なしにかへりぬ是ほどこりて此身になつても。やまぬものハ好色とあふんごとにかたりし。

人にハ棒振出
同前に思れ

金魚が狂言もふるし
江戸櫻のかへり咲
男子がひとつきるもの
朝貌の實を取ぞゝ
前の戸も茶の木と也

巻の二

二 人にハ棒振むし同前におもはれうへ野の櫻かへり咲して折ふしの淋しきに。是ハ春の心して。見にゆく人袖の寒風をいとはず。何ぞといへば。人の山靜なる。お江戸の時めきける。黒門より池のたをあゆむに。えんちう屋の市右衛門とてかくれもなき金魚。銀魚を賣ものあり。庭にハ生舟七八十もならべて。溜水清く。浮藻をくれなゐくゞりて。三つ尾をたらき詠なり。中にも尺にあまりて鱗の照たるを。金子五兩。七兩に買

めてゆくとみて。また遠國にない事なり。是な
ん大名の若子様の御なぐさみに成ぞかし。
仕事も見た事なくてハ。咄にも成がたし。兎角
人のこゝろも武蔵野なれバ。廣しと沙汰する
所へ。田夫なる男の。ちいさき手玉のすくひ
網に小桶を持添へ。此宿にきたりぬ。何ぞとみ
れバ棒ふり虫。是金魚のゑバみなるが。一日
仕事に取あつめて。やう／＼錢二十五もんに
賣て。又明日もつてまいるべしと。下男どもに
けいはくいひて歸る。またこれをみれバ。

爰もかなしく。世をわくれる人有と物あハれ
げに其者をみれバ。大じん伊勢町の月夜の
利[redacted]といへる大臣。我家を立のき。何國に
暮せしもしらざりしに。さりとてハみたく
いかにまへなりぬ。いづれもむかし語りし
友達中間に汝をたふ事大かたならず。去
らぬ事とて。それよりの年月かく淺ましく
暮させし事ハ是非なし。此後ハ我々請取。
貧樂に世をおくらすべしといひけるに。まだ
此身になりても過にしぜいせまずして。女

国立国会図書館　西鶴置土産　W97-8
ガラス使用

郎買の行きへ。かくなれるならひなれば。さ
のみ恥かしき事にもあらず。いかな〳〵の
〳〵の御合力ハうけまじ。利左ほどの者なれ
ども。其時にかひて。悪所の友のよしみ
に。けふをかくるといもれしも口惜。面
の心ざしハ千盃なり。久しぶりにあふ事。又
かさねて出合事も有まじ。一盃の茶碗酒。志
バしの樂なるべしと先立て出。茶屋に腰を
かけて。これ切と。彼廿五矢をなげ出しぬ。
志かも此錢ハ宿なる妻子のゆふべをいそぎ。

鍋あらふて待けるに。そこしもひけぬ心根。
皆々泪に袖口をひたし時雨もしれぬ空なれど
。いざそなたの佗住に行て萬をかたりながら。
酒を呑ならバひとしほ慰にも成ぬべし。
今の内義ハさだめて吉州と。よい中といへバ。
。此女郎ゆへにこそ。かくハなりぬ。けい也
いもまことの有時あらハれて。四年あとより
男子をもふけ。とゝさまかゝさまといふをた
よりに。けふまでハ暮しけると。夢のごとく
語るを。現のやうに聞て。谷中の入相頃に。

国立国会図書館　西鶴置土産 W97-8

ガラス使用

くれ竹の。ざいつき。とまり雀の命も。わしたをしらぬ。ゑさし町の。ひがしのはづれにきぬ。此うらにかたか成すまひ。三人ながらはいり給はぐ。中〳〵腰のかけ所も有まじ。それもよし〳〵何かつくむべしと。案内してゆくに。よし垣に秋をすぎたる朝貌の。すべ葉も枯〳〵になりける。つるをさがし。七十わまりのむぐの。その實をひとつ〳〵取て。又来年の詠をしたりける。されば人間ハ露の命ともいふに。此老人ハと。貌がながめられて。

ばぐさま爰を通りますと。有体の禮義をのべて。埋れ井のはた。越るもあぶなく。影ほしのたばこの。引はへたる細繩のしたゆく程に。窓より。親のおもかげをみて。とゝさまの錢もつて。もどらしやつたと。いふ聲もふびんなり。内義ハむかしの目かしこく。同道せし人〻を見しより。お三人の中にも。伊豆屋吉郎兵衛様是へいらせ給ふまじ。のこる御両人ハくるしからぞいふ。あるじをはしめ。をの〳〵ふしぎを立。いかにして。あれバかりをと

躰

がめ給へるぞといへば。是非なきハ勤めの身。あなたにハ只一度かりなる枕物がたりせし事。いまもつて心にかゝりぬ。あるしにかゝる事もよしなしと。玉なる泪をこぼしぬ。聞に理をせめていたハしく。亭主もまことなるを満足して。女郎の身ハそのはづの物なるに。是ハ也さしきことはりと。時に胸を晴し。是ハわれらが客なりと。三人ともに内へまねき。先御茶といふに薪なく。釣佛棚の[illegible]はづれて有けるを幸に菜刀にてうち割。間をあけせけるもかしこし。扨御ひそりの男子ハといへば。十四五色もつぎあつめたる。ふとんにまきて。裸身の肩をすくめて。嵐をいとふ風情をみて。殊更に哀なり。さむひに是ハといへば。内義うちわらひて。着物ハ捨てあのごとく。かゝと。無理なる口説といひもはてぬに。大溝へ。はまつたれば。はだかになされてさむい。着物がひあがつたらば。着たひと泣ける。あるじも女も随分心づよかりしが。今ハ前後を覺えずなけだに成ぬ。いづ

国立国会図書館　西鶴置土産 W97-8
ガラス使用

れも志むしハ物もいはれず。扨ハあの子がひ
とつ着物かはりもなくてや。親の身として子
をかなしまざるハなかりしに。よく〳〵不自
由なれバこそ。かゝる憂めをみするなれ。何
かたるべきも。なげきさき立をの〳〵かへる
時。三人ながら小語て持合たる少金を取あつ
めて一歩三十八。こまがね七十目バかり立さ
まに天目に入て。是とハ理なしに。出せし
が。亭主もおくりて出しが。さらバ〳〵と夕
暮ふかき道を悲しに。又跡より彼金銀を持て

追かけ。是ハどふしたしかた。神ぞ〳〵筋な
き金をもらふべき子細なしと。人のことハりも
きかずなげ捨て立歸りぬ。是非なく。とつて
戻り。それより二三日過て。色品かへて。内
義のかたへ。もたせつかハしけるに。其也其
人ハ在郷へ立のき。明家となりぬ。色々せん
さくすれども。其行方しれず。三人ともに是
をなげき。おもへハ女郎ぐるひもまよひの種
と。いひ合せてやめける。世ハ定めなし。い
な事がさハりと成て。其頃のうき雲若山。一學。

国立国会図書館　西鶴置土産 W97-8

ガラス使用

三人の女郎の大かそんといひかハりぬ。

撰

170

六

おもはせ奏た
今ハ土人形

毎日の芝居好
女ぎらひとハ云過し
今見る物ハ小むらさき
本まひとつの掛銭
すき腹のかぐつぶし

巻の三

一 おもハせ姿今ハ土人形
御異見たび〳〵尻に聞せて。野郎ぐるひのせ
む事なく。明暮四條がハらにかよひけるに。
道橋のさいくづれけるハ。此大臣のめし
つれられし血氣束社役者。あらけなく
たりぬるゆゑなりと。愛うけたまハりの菱屋
六左衛門がせんさく仕出しぬ。今の都の奢男
然も風俗すぐれて。見ぬ世の中將中古の三左
當代の四六と是をしらぬもなく。毎日の道中
なるを。石垣のおまとも。まゝ喰さしてもし

国立国会図書館　西鶴置土産 W97-8
ガラス使用

り出此面影を見れば。水茶屋の娘とも天目牛
からおとして我商賣をすれし。山の
櫻も日々にハ見られぬじやが。たとへばあの
男いきた如来さまにもせよ。やうも〳〵眼が
つゞく事じや。追付目病の地蔵へ七日まいり
をするであらう。なんの錢一もんにもならぬ
大ぶん。あれよりハ芝居見の出家衆に氣を取り
れ一枚讀こみても三文徳がある。むつかし
い事でハなし。笑ふて見せても物になる事と。
鉛々の母親まハ主人のしかるを聞バ断りぞ

各自

171

かし。是等ハよき所にすみなれて諸人の色あ
る男を見るさへ戀をふくみぬ。まして地女房
ハ一幅帯の腰をぬかしける。たま〳〵男とう
まれ出てそなハつてのく親ほう也。殊更親ハ
後家にて銀持で寺まいり好にて世界ハ我まゝ
といふ大ぶんなり。人に借りぞにあるにまかせ
て。此川原におゐて水の流るゝことくよき物
のらされければ。惣じての太夫本木戸の者。
あまかへるの芝居成こ見せ物の猿までもお貌
を見知つてゑぼしをぬぎぬ。此所を是程迄志

知
烏帽子
脱

国立国会図書館　西鶴置土産 W97-8
ガラス使用

こなしけるハ一とせに千両といつもられける。是違ひあるまじ。一日に金子百両まきちらしても。誰かおどろくものなく。お伴勢様まへ十二灯あげたるやうな所。さのみ嬉しがる者もなし。此大ぶんさりとハ女嫌ひ。つゐに嶋原のけしき遠目にも見ざりけり。されども物にハ時節有野良ぐるひの異見ぶつめられて。是非なくやめぶんの誓紙をかけバ。諸神の手前を恥て其後ハ志ぶねを脱きもせざりき。扨ハ年が薬とおの〳〵よろこびけるに。又女郎ぐるひに身をなし明ぐれ今の居土に出かけて是をとめどいなかりし。人また無用と身のためを申せむ。我等此里へかよひまじとの誓紙ハいたさずと。ゐるかしこき事にりくつをいへバ。後にハ誰かがめる人なくて心のまゝにさハぎて。此町もおもしろからず。名に聞し武蔵野の色ふかき。こむらさきを見にくだりけるに江戸にもきかぬ氣の男。三木とやらが根から引ぬきて其ゆく衛志れざりき。今すこしおそく此よねを見ざる事の口惜。せめて其むらさ

国立国会図書館　西鶴置土産 W97-8

ガラス使用

きに面影のこたるもかな。はる〳〵爰にくだりし甲斐にとせんさくするに。是ぞといふ女郎もなく見ぬ戀するといふハむかし。今の世にハなき事なるに。人の物になりけるときけば殊にゆかしく夢にも其姿を見て京の物語りにもと。人頼みしてたづねけるにさりといふれざりけり。有時淺草の寺町の横筋をゆくに。内の見えずくよしすだれ住あれたる宿の棚に。こむらさき形産と看板出して土人形の細工する男を見れば。京にて立役勤めし嵐三郎

四郎が白むくの上にせれ紙子身をやつし藝に出しよりハなをにくからぞ。いかさま仔細者めと立寄。御亭主此人形ハこむらさきならば先遊女にしてハ帯がせまし殊にうしろのとりなりまんざら人のおかためきたるといへば。いる氣ならば取て御座れ。壹文に壹つづく賣物を無理なる御吟味。それハ七十四匁に賣時のせんぎと笑ひける。何とやらゆかしくされば此女郎を其相に年の明迄買つぐけに。京よりくだりたる男といへば。扨ハよい物ハ

国立国会図書館　西鶴置土産 W97-8

ガラス使用

都までもしるゝ事かな。我等も此女郎におも
ひをかけ。此三とせあまりもこがれしに。勤め
女の事なれば状文になげくもおろかなれば。
兎角かねためて只ひとつ買て。年月の思を晴
さんと此まそきうちより毎日三もんづゝ
錢をして。二年あまりにやう〳〵七拾四匁に
なして。ひとへ二日ゆうちにたよりを求め。
かり着も人の情揚産定めてもやうしけるうち
に。つゐ請出されて扨も無念〳〵と男泣にし
て語る。戀ハ是なるべしと哀れ扨其こむ

らさきがゆく衛いといへば。さらば京の人に
今の様子を見せんと立行かたハ。唐物町の横
町に棚も目に立ぬ程のうちに。むかしの殘り
たる女の見へしが。あれが三浦のこむらさき
とや。今ハ其名も替てお梅とよびける。人の
女房になつて何か戀のあるべし。やれ思ひき
れ外にも戀ハあるものと男を友として。物の
見るに三野にかよひ。今の高尾薄雲に手をそ
ろへて。髭の長兵衛が座敷を我物にして京よ
り持来の三千両いかな〳〵一角も殘らずつか

国立国会図書館　西鶴置土産 W97-8

ガラス使用

ひあげて。又彼男と相住してせめてハ女郎が踏だる上を身過の種と。揚屋町の真砂を金龍山のまつちにまぜて。今ハ又うち雲たかをが姿をつくりて。土にんぎやうの水あそび次第にさびしくなつて。大かたハ火を燒ぬ日も見えしが。是にも腹の用捨なくつれぶしのかハり加賀。つみもなく銀もなく世の人におそれもなく。外の事なく外ませず。よねぐるひの意氣知をかたりて。捋の明たるふたりが仕舞。いまだ三十より内にして一代の榮花。是から

さきの老の入まへ何とかなるべし。此四六大ぶん京都の大分の跡ハ母にさへ見かぎられて他人物になしけるとや。

176

子が親の勘當
さかさまいをおよぐ

茶屋にきゝやうの紋
女郎に男草履取
あつかひい千五百両
手かけが本妻のりんき
江戸に鯉のさしみ賣

巻の三

二 子が親の勘當逆川をおよぐ

替た事を聞ました。莵角宿に居がわるし爰に出かけたればこそおかしけれ。揚屋町の入口の茶屋に桔梗屋といへるかたの女房ハ、分別のまんとて大夫八橋夕霧につきしやり手の開山成が。時節あれば我世を経ておかさまといハる事もたのしみなり。此内に腰かけながらよね達の道中を見るに。いやとおもふハひとりもなし是ぞ又うごきがとれぬとなづむ程成

国立国会図書館　西鶴置土産 W97-8
ガラス使用

もなし。今の世の女郎は志やれて位なし。むかしのちとせ唐崎い。禿やりての外に皆とて鬢切志たる男草履取をつれける。是をおもふに全盛の時なるかなや。孔子くさい人までも朝に道をきいて夕に通ひなれ。何の古文志んぽうされば人間死ぬるといふ道具おとし。是に勝男達もなし。すこしのうちも浮世の隙さへあらば。此美君を詠めまいらせ長命丸といふ薬なり。仙家の不老不死の妙薬取にやるまでもなし。近道に是程よい事を志らさるや

扨最前のかいつた事の咄しのすゑはいかに。されば世に子が親にもてあまし。迚も悪所くるひの異見き給はねば勘當を切とい。前代ためしなき事。其親仁殿は、伊勢町の大盃といへる大志ん。酒より乱れて猩々のぬき手切て、足もとのよろつく掛物をよろこび。揚屋の物好は和泉屋半四郎が二階座敷よしと。山本長左衛門がかゝえの小主水にふかくあいなれて。内藏のさびしくなる事此二とせあまりなり。もまた六十に過て鬢付たしなみ。女郎

国立国会図書館　西鶴置土産 W97-8
ガラス使用

と打死と極めて銀つかひけるを。其子ハ二十八になるまでつゐにわけ屋の疊を蹈し事もなく。七歳の時かき初に絹のふんどし買て中橋の姨よりおくり給ハりしを。今に其一筋にて捋を明。世ゝたりの事のミ大事にかけ。ゆずかなる請酒。今でハ江戸にならびなき酒棚と成しハ。此一子がもたらきなるに親に大ぶんつかひもてられ。内證のつぐかぬ所をなげき。駒込の旦那寺念佛講中をたのみ。男子がいふ所ひとつとして道理なり。世にハ不孝の子ども

親の死一倍といふ銀かる事ハ聞しが。親の身として子を追出し一倍といふ銀を借給ふハ。ためしなき志かた向後色町やめ給へと。さま〳〵の御異見きかず。いかな〳〵此道とまり難し兩方おぼしめしての御あつかひなれバ。只今金子千五百兩悴子が手前よりもらふて給ハれ。あの家を罷出一生親子ふつうの手形とのぞめざねがいの通りにあつかひすまし小判にして親仁を追出しける。これらハ廣き世界に又もあるまじきたハけなり。是をおもふに

国立国会図書館　西鶴置土産 W97-8
ガラス使用

大傳馬町の綿棚に。色すける亭主ありしに。然も此内儀美女なるに。外に又妾をこしらへしを内儀情にて。男のかよへるも氣つくしと我宿にゝ入られしに。後には本妻をりんきしていろ〳〵に迷惑がらせ。程なくさらせける。扨もめづらしきあちらこちらの世の中や。其大盃といふ大ぶんのおさまりハとたづねしに。千五百両を手の物にしてすみ町のまんぢ屋已さつま買しか。跡先の思案なしにいかな〳〵金子一両も殘さす。是程見事にすりける

事たぐひなし。今見れば麹町の六丁目の横町にわいれなる借棚して。鯉のさしみをつくりて盛賣にまハりぬ。因果ハ皿のふちと人の笑ふもかまハず。色里の文どもを包丁のつゝみ紙にして見せけるも。此身にもせいをやめざる親仁いまだ心残りハ。三浦の花むらささにあいてもつべき事の口惜。是非此おもひ入一生のうちにあだにハなさじ我等ハ此無事なれむまだ三十年などハ。たとへ不養生をしても長生を覚有。悴子ハ追付女房を持と三年五年

のうちに。命勝負見えすきたり。子の物ハ親の物なれば。此あとを丸どりにして。二たび花むらさきの願ひなり。迚もの事に一日もはやく男子に。たくましき娌をさづけ給ハれと。無理にむすぶの神をいのるおかし。此諸願成就の時もあるべきか。

180

巻の四

二 大晦日の伊勢年越の琴

玉のさかつき當座に割り
うつくしきもの金太夫
五條の市が物好
長崎の鹿の声
よし野ハいきたまな

女郎請出すといふも。そこしのたりあひなり。ちかき頃。京の三木といへる男。嶋原にかよひての。もの好に。一もんじ屋の唐土よりハと上林の金太夫にあひぬ。いやともあふともいはれぬほどうつくしき者なり。二三座首尾して後。乱酒のうへにて。一歩ひとつ大事そふに取出し。女郎におくれば。是ハと嬉しき貌つきにて。ひそかにいたじきけるを。何が都のあやれもの。ちらりと見て。さも旨まじ

国立国会図書館　西鶴置土産 W97-8
ガラス使用

き事なれど。此太夫のたたるほど。さもしく見へける。それより四五日も過て。熊谷の大ぶりなる金の盃とさんごじ日の盃とかさねて。太夫にとらせければ。更によろこぶ氣色もなく。金盃ハ庭はく男にとらせ。玉のさかづきハ双六盤の下に敷て。みぢんにくだき捨ける。罪も欲もなき此心をかんじ。是バかりのおもひ入何の子細もなく請出しける。此大志んハ太夫の五人七人我物にしてそこしもいたまぬ身躰なり。此まへ長崎の鹿といふ大臣

ハ。さのみ手前のよろしきにもあらずして此さきのよし野にあひなれ。そも〳〵日いひかわして追付根引して。我本妻にせんとおもひ込し。女郎の仕合なり。此男三條の唐人屋といふ兩替に銀三百貫目あづけ置。都にてよき所を見立。家屋敷を求め。一生の身すぎ。是にてなるやうにと。おもひし銀子取かへし。吉野を千三百兩に請出し。萬事のつけ屋をしまへバ。三百貫目も殘つて。七貫目有けるとなり。此内證にて請けるハ。好色第一の男な

国立国会図書館　西鶴置土産 W97-8
ガラス使用

り。されば此太夫ハかつて遊女の風俗なくて。さのみ物いふにもあらず。よハ〳〵と見へてつよく。志かもなさけふかく。たま〳〵にあへる男も心を残さぬハなし。首尾見合せて。根引にせんとおもひし男。其数を志らず。人の物にして後。是をなげきて。嶋原がよひをとまるも有又ハさゝぎかへて。此里おもしろからずと。色河原の野良にのりかゆるもあり。よし野。くるゝを出し後。京中の戀をなせませける。其後此太夫を地女房にすがたを

つくり。難波の梅の頃。天王寺の花の晝。谷町の藤のたそがれに。御所かづきの内ふかく。随分身のふりやめて。男ハおそろしき風情して。黒はぶたへの紋なしの小袖に。龍門の帯も目に立ぬ仕出しなれど。数千人の形。自慢の女中もよし野が志のび出立にけをされて。いづれの細工人の。かくハつくりけると。外を見る人ハなかりき。さてハ世の中の人も目利ハかしこし。纔五尺にたらぬ身を小判でのべたる上作物をみつけ侍る。それより生

国立国会図書館　西鶴置土産 W97-8

ガラス使用

國長崎へ舟路にてつれくだりしに。讃州泊の磯といふ所にて。夏の夜。月平砂にかゝせきて龍女も浪間よりあら出。京のよし野しんといふ聲。虚空に聞へし美形。是にて見ぬ人ゆおもひ合せ給へ。たとへ分限なれハとて。七重釜にて。せんそくをわかし。さし鯖を霜月頃にくふ人の目からハ。たハけのやうにおもふべけれど。既に人間とうまれ。日本まれなる女郎を。ていけにするより外に。何樂み有べし此大臣ののがれぬ人も。太夫の野風を請て。

伏見の里にしやれて住ける。よし野ハひかし山の片陰。栗田口のほとりの草屋。そこし郡をはなれての住居。男ざかりに法躰して月にも花にもよし野を詠め。あした。夕べの樂しみに。太夫が手づからのせんじ茶をくませ。よろづに他の人をませず。碁相手。揚弓の友。暮にハ女鞠も花あり。風待すゞみ床に名の木をかほらせハ。初雪のあしたハ歌に心をなし。世にある。きやしやあそびをしやし。雨の折ふしハほとゝきすもなけかし。ほたるも数見

る夜のなぐさみ。又ある時ハ夫婦水菜などこしらへて。寐酒の種となす事。ひとしほ醉もおもしろかるへし。ある年のくれに。五條の市といふ大臣。左門といふ女郎を請て。其花ざかりより。いまにちぎりをかさね。隨分世を樂むまんして。此よねをつれて。年籠の伊勢まいり。何の信心にハあらず。ゑよりばかりの旅出立。世間のいそがしきをりなるに。おそらく京都に我ひとりと粟田口を行に。小家がちなる所にて。正月の事ども。せかましき

四

志れぬ物ハ勤女の子の親
目に見ぬ戀に皆にふし

先ハ班女がこゝろ入
やまぬかよひぢ
取沙汰の男ぬ
死ふとの御異見
さる人に智恵あり

巻の五

二　志れぬ物ハ子の親

至り世んさくにして。素人の珍重がらぬ物。本手のこうたぞかし。番町に。さる御かたの隠し藝に。八筋掛を忍び駒にて引せられしが。又もなき音曲是を役者の九兵衛が御指南うけてまねびしに。それも作彌むかしに成て。花橘も袖の香も。さる物ハ日々にうとし。浮世をみぢふいふ人。さりとハ無分別極樂にゆきて精進鱠ふて。物がたひ佛つきあひより。筋鰹のさしみに。夜を明して。落し咄

しの大笑ひ御機嫌取の城俊。めにハ見ねども
彼噂こまかしくかをもしる事かな。これら今
かハゆがる太夫が久しく引込勤めざる仔細を
しつたか。成ほど〳〵此御腹に若君一人おハ
しますといふ。誰がしらせたぞ弓矢八幡深川
の助六が子に極めけるとや。それハ生れぬさ
きのむつき定め。此子が娘ならバ十露盤もつ
て。男子ならバ反古間の帳をもつて生るべし
。扨ハ町屋の大臣かときけバ。なんの事ハご
ざりませぬ両替屋のこまかなるやつが子なり

。おまへさまもあひ聟なれバ。そこしハお身
にかゝりたる事ぞといふ。いづれも笑をも
やうし其大臣奉加につかざるや。座中も耳に
かゝる折ふし。いざ此坊主を勾當になせと大
分はづませ給へハ。是ハ夢かや宇津の山を越
て。都の人にあふも嬉しく旅の日數をかさね
。けふハ相坂の宮も見らやもむかしの人。我
身のつらさに。ひとしほおもひ出で。ゆへざ
る眼の泪をのづから。午向ともなりぬべし。
今ハその撥をとも絶へ琵琶の海も跡になして

国立国会図書館　西鶴置土産 W97-8
ガラス使用

。日高に京入して三條の何がしとかやいふ人
の宿かりて。官位の大臣其日がわを見合せけ
るうちに。都の大臣。よし野にあへる一興に
。いざあひめとすすめられて。其人の引導に
すかせ。東ぢにゆけバ。西嶋の細道名殘おゝ
にゆけバ。北の方やら。むしやう
る。宋雀の野邊誰ぢや。上林のかほる。お茶
ハ初むかしか。迎もの事に此目をおけて見せ
給へ。物ごしに罪をつくりて。九やの七右門
が座敷に入て。おかみけなる戀づくしいやと
否、

もあゝとも。いなせぬ情。江戸に替りて物や
さしくたいふれのみだれ酒に城後が手前にま
りいたと見へし時。そんじやうこいつ
女郎見かねて。これをもはけられしを。ぶつ
もあらぬほどうれしくて。それからそくに
まれ出して。よく〳〵なれべこそ嬬の吸物。
を通らず。今宵の明て歸るを待兼。人を
みてくどきかけ。やう〳〵ふしぎの首尾し
て。忠のびく〳〵に合力のよひけるほどに。
小判包紙も殘らず。いまハ官位の望も絶て。

国立国会図書館　西鶴置土産 W97-8

ガラス使用

あづまに歸るもをしばなく。身の置所せまけれども。さらに後悔するにあらず。女郎にあはれぬ身の上をなげき。世に住からのつらさなり。兎角は佛の國へと覺悟極めてゆく水の。伏見の里の暮にまよひ。六のちまたの地藏を過。豊後橋の半ばにたりて最期を爰に極め。かたけの扇に風は無常の夕ざれ。むんじやうが床のおもいく。いつの世にかは忘れじ。水もなさけあらば。今なぐる身をうづに沈め。形を二たび人にさらすなと。あしを揃へて飛

入折ふし笹屋の何がしわたり合せ。志かもけしれる法師なれば。是はと引とゝめ。橋づめのすびしき茶屋につれて。是非にやうすを語せ聞て。此人も男泣して。命有ゆへの戀なれば。暫く京都に身を隱し。人の氣を取。つとめ居ば。ふたつの望もかなふべしと。智惠自慢の異見して世上は何のさたなく。かくまへける。誰かこの事をつけわたる。雁金屋の利右衛門など。よしなきむんじやうにつたへければ。常の人とはかはりて。此落ぶれしを。

国立国会図書館　西鶴置土産 W97-8

ガラス使用

悲じく。わたくしの衣裝諸道具の花車なるを代なし。ひそかにたよりを求め。官位をもゝめしに。おもひもよらぬ心づかひ。何とて請べき子細なしと。京も俄にむつかしく淀舟に飛乗。難波の北濱にあがりて杖さへもたぬ座頭の坊。身ハ薄衣に露霜置て。秋の哀を人もしるにや。藝ハ身をたすけて。糸による戀の歌。三味線ひく手になびけとハ。目くら神の道びき給ふか。いまハ目がまぬ心から色事ハ捨ける。

国立国会図書館

国立国会図書館　西鶴置土産 W97-8

ガラス使用

ガラス使用

国立国会図書館　　西鶴置土産　W97-8